

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年七月二十七日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 村戸弥生(金沢美術工芸大学非常勤講師)

狂言 佐渡狐(さどぎつね)

都の領主のもとへ年貢を納めに上る越後と佐渡の百姓が二人。道すがら、佐渡に狐がいるかないか口論になり、腰の刀を賭けて御館の奏者に判を頼みます。狐はいると言いつ張りながら、狐を知らない佐渡の百姓は、前もって奏者に袖の下を贈り、狐の特徴を教わっておいて、越後の百姓の問いにどうにか答え、奏者に勝たせてもらいます。しかし、狐の鳴き声を問われて窮し、「月星日と鳴く」(これは鶯の鳴き声)の言い逃れは通じません。

能 殺生石 白頭(せっししょうせき) しろがしら)

玄翁道人(ワキ)が奥州歴任に区切りをつけ、冬夏の安居(外出しない修行)を志し、上京の旅に出ます。途中、下野は国那須野の原に着いたところで、里の女(前シテ)が現れて石のほとりに近づかぬよう忠告します。昔、鳥羽院の上童に玉藻の前という人がいて、彼女の執心が凝り固まった石であるため、近づくものの命を奪うとのことです。荒涼とした秋の夕暮れの原野で、里の女は玉藻の前の魂がこの地にあるいわれを語ります。素姓の知れない容顔美麗の前は、才色兼備を寵愛されて帝に近づき、ある夜の御遊に身体から光を放って、内裏は大騒ぎとなります。以来帝は発病し、安倍の泰成の占いにより、王法を傾ける化生の企みが露見します。調伏された玉藻の前は那須野の露と消えたそうです。詳細を語る里の女はいにしえの玉藻の前、今は那須野の殺生石の石塊であると明かして石の中へ隠れます(中入)。玄翁が仏事をなし石魂の成仏を祈ります。すると石が二つに割れ光が差して、恐ろしい狐鬼(後シテ)が現れます。天竺では斑足太子の塚の神、大唐では幽王の後褒姒と現れ、わが朝でも玉藻の前となった化生の物は、安倍の泰成に調伏されて那須野に隠れ住むところを、勅諭を受けた三浦の介・上総の介に射伏せられました。鬼神はその様を懺悔に再現し、悪事を断つことを約束して失せます。

白頭の小書がつくと、後シテは赤頭ではなく白頭をつけます。(西村 聡)

前シテ (里 女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、万媚又は泣僧の面をかける。摺箔を着附に着て、上に唐織

を着る。(持物、扇)

後シテ (野干の精) 赤頭をつけ、小飛出の面をかける。厚板を着附に着、半切をはぎ、上に袷法被を

着て、腰帯をしめる。(持物、扇)

(午後七時頃終了予定)